



第4 1回比較文明学会大会

混迷する世界と文明の未来
—長崎で考える共生—

2023年**11月10日(金)**～ **12日(日)**

目次

大会趣旨	2
大会概要	3
大会1日目 プログラム	5
大会2日目 シンポジウム プログラム	7
大会2日目 シンポジウム 要旨	8
大会3日目 公開講座 プログラム	11
大会3日目 公開講座 要旨	12
大会3日目 個人研究発表 プログラム	18
大会3日目 個人研究発表要旨【部会1】	20
大会3日目 個人研究発表要旨【部会2】	22
大会3日目 個人研究発表要旨【部会3】	26
大会3日目 個人研究発表要旨【部会4】	31
大会3日目 個人研究発表要旨【部会5】	36

第 41 回比較文明学会大会趣旨

大会テーマ：混迷する世界と文明の未来～長崎で考える共生～

200 年にわたる日本近世の鎖国時代、世界中の文明情報はあたかも凸レンズが光を一カ所に集めるように、長崎に焦点を結んだ。その一方で日本文明も長崎に集約し、世界に発信された。その意味で、長崎は日本と世界を繋ぐ文明の発受信の基地として機能してきたと言えるだろう。

しかし、長崎は、単なる情報交換の中継地であったというばかりではなく、世界の諸文明が交わり、融和し、平和的に共生した文明共生システムが形成され、機能していた場所でもあった。つまり、オランダを中心とする西ヨーロッパ文明のみならず、東、南、西、東南アジア各地の政治・経済・文化等の文明の諸要素が、日本文明との調和を前提に、平和裡に共生した知的伝統があった。それは、近年復元整備された「出島」を訪れれば多くの痕跡を見ることができる。

第 41 回比較文明学会大会においては、近世日本を代表する国際交易都市にして、諸文明の融合と共生を成し遂げてきた長崎の地においてその「文明的財産」を検証しつつ、この世界が直面する諸問題に向き合い、「共生」について考える機会としたい。

比較文明学は、人類の営為を余すところなく研究対象とし、分析と総合、あるいはミクロとマクロの両視点を有機的に結び付けつつ、学際的に検討する学問である。また、単に過去の事実の検討を目指すのではなく、未来志向の学として、過去から現在までの歴史を実証的に研究することを目指している。その意味でも長崎において学会大会を開催することには大いに意義があると考えている。

本大会では、初日(11月10日)には、長崎の歴史的発展や意義についての対談、二日目には、『長崎で文明の共生を考える～「交流」と「融合」の歴史と意義』をテーマにしたシンポジウム、三日目は会員の研究発表に加え、長崎に関する研究者の発表セッションをそれぞれ開催する。また、本大会には国際比較文明学会の会長、副会長もオブザーバーとして参加される予定である。共催者として中央大学政策文化総合研究所を迎え、長崎市の後援を得て、長崎歴史文化博物館などと協力して、長崎の市民研究グループや市民の方々の広範な参加を実現したい。

保坂俊司

第 41 回比較文明学会大会実行委員会実行委員長

第 41 回大会概要

日程：2023 年 11 月 10 日（金）～ 12 日（日）

場所：長崎歴史文化博物館（〒850-0007 長崎市立山 1 丁目 1 番 1 号）

出島メッセ長崎（〒850-0058 長崎県長崎市尾上町 4 番 1 号）

【大会 1 日目 2023 年 11 月 10 日（金）：長崎歴史文化博物館ホール】

16:30～ 受付開始

17:00～19:00 鼎談：「長崎に学ぶ 共生の歴史」

発表者：赤瀬浩（活水女子大学教授）

発表者：島田竜登（東京大学准教授）

司会：保坂俊司（中央大学教授）

【大会 2 日目 2023 年 11 月 11 日（土）：出島メッセ長崎】

10:30～12:30 役員会【主催者会議室】

13:00～ 受付開始（一般会員：3,000 円、学生会員：500 円、一般無料[一般の方で資料の希望がある場合は 500 円で頒布します]）

13:30～17:00 シンポジウム：「長崎で文明の共生を考える：「交流」と「融合」の歴史と意義」【会議室 108】

発表者：保坂俊司（中央大学教授）

「長崎における文明の共存共栄の知恵の現代的意義・・・小さな長崎の大きな知的遺産」

発表者：山口美由紀（長崎市出島復元整備室専門官 学芸員）

「出島 交流と融合の DNA」

発表者：山下範久（立命館大学グローバル教養学部教授）

「近世のグローバリティと日本型「交易港」としての長崎」

司会：吉野浩司（鎮西学院大学教授）

17:15～18:15 総会【会議室 108】

18:15～20:15 懇親会（会費：一般会員 6000 円、学生会員 3000 円）

【大会 3 日目 2023 年 11 月 12 日（日）：出島メッセ長崎】

- 9:00～ 受付開始
- 9:30～11:30 公開講座：「長崎学：共生の街で考える」【会議室 108】
発表者：齋藤義朗（長崎県文化振興・世界遺産課 学芸員／長崎
外国語大学新長崎学研究センター客員研究員）
「長崎の洋式ホテルにおけるアメリカ人歯科医の巡回診療—先
進歯科診療所が置かれた長崎居留地のホテル—」

発表者：田中学（長崎市長崎学研究所主事 学芸員）
「近世港湾都市長崎の形成に関する考古学的研究」

発表者：島由季（大浦天主堂キリシタン博物館 学芸員）
「潜伏キリシタンのイナッショ（イグナティウス・デ・ロヨラ）
崇敬」

発表者：長岡枝理（長崎歴史文化博物館 研究員）
「《聖福八景図詩巻》に見る 17 世紀末の日中文化交流—忘れら
れたはざまの世代について」
- 司会：中牧弘允（国立民族学博物館名誉教授/吹田市立博物館
特別館長）
- 11:30～12:15 国際比較文明学会（ISCSC）会長[Lynn Rhodes]・副会長[Michael
Andregg]発表および挨拶・英語セッション
- 12:15～13:30 昼食
- 13:30～16:30 個人研究発表

連絡先：第 41 回比較文明学会大会実行委員会（E メール：jscsc41st@gmail.com）

大会 1 日目 プログラム

鼎談：「長崎に学ぶ 共生の歴史」

2023 年 11 月 10 日（金）17:00～19:00（16:30 受付開始）

長崎歴史文化博物館

登壇者

赤瀬浩（活水女子大学教授）

島田竜登（東京大学准教授）

司会

保坂俊司（中央大学教授）

本プログラムでは、長崎に於いて形成されてきた諸文明共生思想の知恵の現代的な意義について、長崎研究の泰斗である赤瀬浩活水女子大学教授、東西文明交流史のホープである島田竜登東京大学准教授をお迎えし、比較文明学会会長保坂俊司が司会を務め、長崎における諸文明形成の歴史やそこに形成された知恵の現代的意義の一端などについてお二人にお話を伺う。

幕藩体制下の長崎は、国内外の人・物・金・文化などの諸情報が集中し、独特の融和共生社会を形成していた。ここ長崎は、文明の坩堝であり、新たな情報を生み出す文明経典でもあった。ここで生まれた情報は、日本国中へ、そして世界各地へと発信されていた。長崎は、日本の近世に於いて、内外の情報の発受信を一手に引き受けた国際都市でもあった。

所謂日本の近世は、西洋中文明が世界を席卷する過程、いわば現代に通じる新国際秩序の確立期であり、新旧文明交代の激動の時代であった。この時代を通じて西洋諸国は、自らを中心とする国際秩序を、軍事力、経済力、更には科学技術力等を総合化した圧倒的文明力で構築していった。例えば、現代社会にまで影を落とす世界各地の植民地化は、その帰結であった。しかし、小さな島国日本は、植民地化という災禍を免れた。その功績の多くは、この小さな港湾都市にして、偉大な国際都市長崎に帰される、といっても過言ではない。

この事実一つとっても長崎が果たした歴史的役割の大きさは明確である。更に東アジアの国際秩序の大変動であった明清の王朝交代時の大混乱も、主にこの長崎により受け止められ、その衝撃は沈静化された。この様に長崎は、近世を通じて、海外からの情報の大津波を確実に処理することで、日本を護り続けてきた。更に長崎は、世界に開かれ

た殆ど唯一の情報受信の拠点として、日本を進歩発展させる原動力にもなってきた。しかも、国内外の情報が一点に集中する長崎には、文化、文明が平和的に共存し、平和的な共生文化が形成されていた。つまり、長崎には、現代のグローバルレベルに不可欠な文明共生の雛形を見出すことができるのである。

長崎がその歴史を通じて形成してきた諸文明共生社会には、分離、対立、そして抗争など、現代文明が直面する諸問題の解決に大いに貢献できる文明融合や、それらの共生を可能にする知恵を見出すことが期待できる。

また、長崎は西洋近代文明による文明レベルの大転換期に於いても、非戦を貫き、国際社会との平和的な共生を実現させた強靱な精神文化が存在している。その精神は、人類の全体の悲劇とも言える原子力爆弾による災禍をも乗り越えることを可能にした。

その意味で、ウクライナへのロシアの侵略戦争に揺れる国際社会、更には中国と近隣諸国との領土に関わる軋轢などをはじめ、嘗てない東アジアの危機的状況に直面する国際社会において、長崎が歴史的に培ってきた知恵は、偉大な世界遺産であると言える。少なくとも、日本の進むべき道を考える時、誠に大きな貢献を為す意義を持っているのである。

本プログラムは、国際都市「長崎の歴史に学ぶ共生」と題する第 41 回比較文明学会長崎学術大会の特別プログラムである。

主催：比較文明学会

共催：第 30 回中央大学学術シンポジウム「情報文明における共生思想構築に向けての基礎的研究」（研究代表者：保坂俊司）

後援：長崎市

大会 2 日目 シンポジウム プログラム

長崎で文明の共生を考える：「交流」と「融合」の歴史と意義に学ぶ 共生の歴史

2023 年 11 月 11 日（土）13:30～17:00（13:00 受付開始）

出島メッセ長崎 会議室 108

発表者

保坂俊司（中央大学教授）

「長崎で文明の交流と共生を考える——長崎で育まれた諸文明共生の伝統知の研究 長崎における文明の共存共栄の知恵の現代的意義・・・小さな長崎の大きな知的遺産」

発表者

山口美由紀（長崎市出島復元整備室専門官 学芸員）

「出島 交流と融合の DNA」

発表者

山下範久（立命館大学グローバル教養学部教授）

「近世のグローバリティと日本型「交易港」としての長崎」

司会

吉野浩司（鎮西学院大学教授）

長崎における文明の共存共栄の知恵の現代的意義 …小さな長崎の大きな知的遺産

保坂俊司

(中央大学教授)

人・物・情報の移動スピードは、文明の進化と比例してきた。しかもその進化のスピードは近代科学文明以降、猛烈なスピードで進歩してきた。更に、AI時代を迎えその変化は、革命的と云う言葉が相応しいほどである。このAI時代においては、世界中との情報交換は瞬時であり、物資も一日もあれば世界を一周できる時代である。今や時間・空間の存在は、嘗ての様に人類の活動に大きな制約を持たなくなった。つまり、地球は実質的に、人類にとって非常に矮小化したということである。

しかし、これはいわば物理的なつまり文明のハード面の話である。しかし、人類社会は、この急激な世界のAI技術化、つまり高度情報文明化に対して十分適応する手段、更には知恵を見出せ得ていないからである。つまり、文明のソフト面での進歩がハード面に追いついていないのである。つまり、地球が実質的に矮小化する中で、その重要な構成要素である多様文化、文明間の嘗て無い程の濃密な接触への対応へのソフト面での基本的知恵が確立していないのである。

兎角、文明の進歩においては、ハード面である技術的進歩が先行し、ソフト面は後追いとなる。その為に、実際には様々な問題が引き起こされる。そこに歴史に歴史の出番がある。なぜなら人類の進歩とは、先行する技術との共生を可能とした文明のみが存続発展し、歴史を形成してきたからである。故に、高度情報化文明は、人類文明最先端であるが、巨視的には人類発展史の一部であり、その延長線上にある。とすれば、現在文明が直面する諸問題の解決策も歴史の中に見出しうるはずである。

その意味で、この長崎という小さな港湾都市で歴史的に形成された知恵、つまり、この長崎の営みから生まれた諸文明の共存共栄のソフト領域の知恵の発掘と、その現代的な意味付けは、グローバル時代に求められる地球規模の諸文明の共存共栄の知恵の構築に日本発の情報として、大いに貢献できる可能性を持つと発表者は考える。

具体的なヒントは、徳川幕藩体制下における中央集権的な外交の方針と、長崎における自由度の高い諸文明（西洋・東アジア）の交流を支えた良い意味での本音（現実）と建前（理想）の使い分けの知恵である。この点は、西洋近代的な一元的思考では、評価が低いのであるが、理想と現実の折り合いを付けつつ、つまり固有性を維持しつつ、普遍性をも共有できる知恵が個々には見いだせる。それは決して単なる妥協ではない。高度な科学力、軍事力などを含む文明力で、他者を圧倒し、殲滅してきた近代科学文明にはない、個性を護り、生かしながら一つの理想社会を形成するためのアジア的知恵であり、それを実現してきたのが国際都市長崎の歴史的叡智である、と発表は考えている。

出島 交流と融合の DNA

山口美由紀

(長崎市出島復元整備室専門官 学芸員)

長崎は、その地理的環境から育まれた複雑な歴史、文化を個性とする都市です。

これらのひとつひとつが長崎を構成する DNA であり、時には突出し、また時には相互に関連を持ちながら、現在まで息づいています。

出島は、この長崎らしさを濃密に凝縮した場所であります。築造当初から外国人を居留させることを目的として造成された人工の島。その実像は、人々を囲い込み、自由を奪うものでありましたが、一方でこの小さな島は、人々が出会い、交流する場所でありました。また交流のその先にある融合、他者を尊重する観点など、出島の歴史に学ぶことは多くあります。

時代を物差しとする時、出島は、過去の歴史的な中継貿易の地から、長崎の人々の生活拠点へと変化し、現在は多くの来場者が訪れる学びの地として活用されています。

また、世界各地へと広がり、あるいはもたらされた人、物、情報は、江戸時代にあつて、世界と日本がつながり、相互に影響を与えていたことを示しています。

最近では、江戸時代の出島が、異文化交流の拠点であったこと、オンリーワンの貿易活動が行われていたこと、新しい技術や学問、思想を求めて日本各地から長崎に才能ある人々が集まったこと、などが出島という言葉のイメージとされ、現在では、国際的な交流や取引の舞台であること、新たな枠組での起業、本体から離れ自由な裁量で結果を出す分野、などを指して“出島らしい”という新たな定義がうまれています。このため、土地としての出島の定義から離れ、施設や組織、企業体など、様々な枠組みに出島という名称が付けられる機会が多くなっています。

往時、出島が交流の地であったという本質的な価値に基づき、これに紐づいて行われる現代的な各種の交流は、付加的な価値となり、新たな長崎を構成する DNA の一つとして育ってゆきます。



近世のグローバリティと日本型「交易港」としての長崎

山下範久

(立命館大学グローバル教養学部教授)

長崎は近世以来の交易港の街として知られる。ポルトガル船の寄港地としてのその始まりから、この港は文明間交渉のなかにあった。そもそも交易は共同体のはざまに生じるものであるが、カール・ポランニーは、そうした共同体のはざまにおいてむき出しになるリスクのゆえに、取引が行われる場所は、なんらかの政治的権力（ひとつの典型としては帝国）によって、そのために「交易港 (port of trade)」としてしつらえられ、そこで管理された交易 (administered trade) が行われると論じた。

もちろんこれは、すべての交易が交易港を介して行われるということの意味しないし、「交易港」自体もその背後にある政治的権力のあり方によって大きく異なる。しかし、国民国家によって構成された世界が常態化する以前においては、むしろ交易のネットワークで結ばれた都市と帝国から成る世界が常態だったのであり、20世紀末葉以降のグローバル化は、この古い常態があちこちで露出する過程とみることもできる。近世の長崎をグローバルな視野において見ることは、国民国家によって構成された世界を常態視するマインドセットを相対化し、都市のネットワークと帝国をベースに捉え返された近世的グローバリティが、いわば現代のグローバル化の古層としてどのように作用しうるかを考えることにつながるだろう。

他方、ネットワークを強調する議論は、つながりへの注目から世界をフラットに描きがちになる。だが実際には、特に近世において、ネットワークを介して「接続された世界」は、ある次元では「世界の一体化」をひきおこしつつ、別の次元では、いわば異なったかたちで想像された複数の〈世界〉が併存する過程であった。その意味で、長崎は、基層のグローバリティにおいては、たとえばマニラやアカプルコ、スーラトやトラブゾン、セビリアやマルセイユといった近世の交易港と同時代性を共有しつつも、後に「鎖国」と呼ばれる国境管理体制を敷いた日本を文脈とすることで、独自の性格を帯びた。

本報告では、文脈としての日本を比較文明的な視座に置き、①周辺文明としての日本、②イスラームの外部世界としての日本、③帝国としての日本という三つの視角から、近世日本の「交易港」としての長崎について考えてみたい。そこからは、単純に「世界に対する窓」や「オープンな海港都市」といったグローバル化の開放的な面と結びつけられた長崎像だけではなく、むしろグローバル化が進み、いわば共同体とそのはざまの図と地が半ば入れ替わったような世界において、いかに信頼の脆弱性のリスクに向き合う態度と技法が問われることになるだろう。

大会 3 日目 公開講座 プログラム

「長崎学：共生の街で考える」

2023 年 11 月 12 日（日） 9:30～11:30（9:00 受付開始）

出島メッセ長崎 会議室 108

発表者

齋藤義朗（長崎県文化振興・世界遺産課 学芸員／長崎外国語大学新長崎学研究センター客員研究員）

「長崎の洋式ホテルにおけるアメリカ人歯科医の巡回診療—先進歯科診療所が置かれた長崎居留地のホテル—」

発表者

田中学（長崎市長崎学研究所主事 学芸員）

「近世港湾都市長崎の形成に関する考古学的研究」

発表者

島由季（大浦天主堂キリシタン博物館 学芸員）

「潜伏キリシタンのイナッショ（イグナティウス・デ・ロヨラ）崇敬」

発表者

長岡枝理（長崎歴史文化博物館 研究員）

「《聖福八景図詩巻》に見る 17 世紀末の日中文化交流—忘れられたはざまの世代について」

司会

中牧弘允（国立民族学博物館名誉教授/吹田市立博物館特別館長）

長崎の洋式ホテルにおけるアメリカ人歯科医の巡回診療

—先進歯科診療所が置かれた長崎居留地のホテル—

齋藤義朗

(長崎県文化振興・世界遺産課 学芸員／長崎外国語大学新長崎学研究センター客員研究員)

本報告では、長崎発行の英字新聞の情報(1861-1928)をもとに、長崎の外国人居留地における洋式ホテルの設立状況を俯瞰し、同地を代表する2つのホテルを舞台として、複数のアメリカ人歯科医が先進的な歯科治療を行っていたことを紹介する。

1859年(安政6)の開港により長崎に外国人居留地を開くに当たり西洋人医師たちも長崎を訪れ、医療を開始したが、歯科の分野については常勤医が不在で、居留地の外国人たちは巡回診療で長崎を訪れる歯科医を頼りにしていた。そのなかで1894年(明治27)3月27日付「ライジングサン・アンド・ナガサキ・エクスプレス」の広告以降、頻繁に紙面に登場するのが神戸在住のアメリカ人歯科医ハロルド・スレイドである。スレイドは年2回(春・秋)、各回10日から2週間ほどの期間診療を行っており、99年(明治32)までに12回の巡回広告を確認できる。この頃のアメリカは、南北戦争(1861-65)で外傷による口腔外科需要が増加し、技術も躍進、世界的な歯科医療先進国となっていた。

スレイドが長崎の滞在先兼出張診療所としたのが南山手11番のベルビュー・ホテルであった。1863年開業の同ホテルは長崎で古参の代表的ホテルで、1895年から英字新聞に掲載されはじめた来訪者宿泊先一覧で常に最上位を占める存在であった。

スレイドの歯科治療広告(94年3月)で注目されるのが「無痛抜歯のためにガスを投与する」の一文である。「ガス」とは吸引麻酔用の笑気(亜酸化窒素)を指すと思われ、ベルビュー・ホテルの一室でガス麻酔による全身麻酔下の無痛抜歯を実施していたようである。確認できる国内初例は1891年であり、スレイドの実施時期もかなり先進的な事例と言える。なおスレイドは、ナガサキ・ホテル開業直後(1898.9)から滞在先を鞍替えしていた。

1899年4月20日付「ナガサキ・プレス」では、アメリカ人歯科医ラッセル・クッシングが長崎への永住を考え、開業間もないナガサキ・ホテルを拠点に診療する旨の広告が掲載されている。その治療法は、クラウン(被せ物、冠)、ブリッジ(架工歯)などで、虫歯＝即抜歯が主流の同時期日本ではやはり先進的な治療法であった。

クッシングが拠点としたナガサキ・ホテルは、98年9月に大浦43～45番で開業したレンガ造り三階建て、客室数56、125人収容の食堂などがある長崎随一のホテルであった。「完璧な衛生設備」と冷蔵設備をもち、各室に電気照明、電気ベル、電話を完備、

開業広告で「東洋一のホテル」を謳った。果たして前出の英字新聞上の長崎のホテルランキング筆頭の座も開業からわずか2週間で同ホテルへと移っている。

99年8月、クッシングは診療所をナガサキ・ホテル4号室に常置する。この4号室はクッシング来崎前にスレイドが診療所として使用した部屋でもあった。クッシング以後に巡回診療で長崎を訪れたアメリカ人歯科医たちも同じくナガサキ・ホテルの一室を使用している。

このように歯科治療の出張診療所としてホテルが選ばれ、かつナガサキ・ホテルに集中した理由は、ホテルという存在がもつパブリックスペースとしての機能に加え、「完璧な衛生設備」、電気・冷蔵設備を完備したナガサキ・ホテルの医療空間としての適性のほか、同ホテルの立地、知名度なども影響していたのではないかと推察される。

INTIMATION.

Dr. HAROLD SLADE, resident dentist of Kobe, is visiting Nagasaki, professionally, and may be consulted at the Belle-Vue Hotel. He intends leaving Monday, 2nd, for Kobe, thereby making his stay shorter than was originally announced. He will be happy to see any patients who may require his services until Saturday afternoon of this week.

Dr. Slade administers gas for the painless extraction of teeth.

Nagasaki, March 27th, 1894.



【2】

【1】

NOTICE.

DR. R. CUSHING,

SURGEON DENTIST,

HAS permanently established his Office in Room 4, NAGASAKI HOTEL.

SPECIAL ATTENTION given to CROWN, BRIDGE, and the more MODERN SYSTEMS of DENTISTRY.

Nagasaki, 7th August, 1899.



【3】

【4】

図版説明

【1】

ハロルド・スレイドの歯科治療広告。末尾に「ガスによる無痛抜歯」を記している。*Risig Sun and Nagasaki Express* 1894年3月28日。(長崎歴史文化博物館蔵)

【2】

ベルビュー・ホテル(南山手11) 長崎の洋式ホテルでは古参で1920年(大正9)に閉鎖。(齋藤蔵)

【3】

1898年の開業間もない頃のナガサキ・ホテル(大浦43~45) 1924年(大正13)に閉鎖。(齋藤蔵)

【4】

ラッセル・クッシングの歯科治療広告。ナガサキ・ホテル4号室への診療所常設、クラウン、ブリッジなどの先進治療法を行うことを記す。*Nagasaki Press* 1899年8月8日。(長崎歴史文化博物館蔵)

近世港湾都市長崎の形成に関する考古学的研究

田中学

(長崎市長崎学研究所主事 学芸員)

中世末から近世にかけての日本史上、開放性や国際性を強調される長崎であるが、ここ近年は「港市」などの用語も加わって補強されたように見える。その一方、「港市」の実態がどこにあるのか具体性に欠けるため、東南アジア史研究でよく知られる「港市国家」の「港市」とほぼ混用している恐れがある。理論的な再整理もさることながら、具体的に例証することで、「港市論」の再検討を行うことは喫緊の課題である。

当時の情報として具体性に富んでいるのは、文献資料のほかに、地形的条件や発掘調査に基づく考古資料である。本発表では、地形、港湾施設、主要な街路と家並みなどを考古学的に分析することで、「港湾都市」長崎の形成過程を追う。この際、長崎の前段階と目される横瀬浦や大村城下町からの変化も併せて動的に捉えたい。このことにより、1571年（元亀2）の町建てから、豊臣直轄領化を経て、1605年（慶長10）の徳川直轄領に至る短期間において、長崎が細かに変化した様相とその特徴を明らかにする。

また、このような港湾都市について、長崎と同時代の諸都市やいわゆる「港市」との比較も行いたい。これについては、分類諸要素の有無などによる一般的な、漫然とした比較にとどまることなく、カール・ポランニーのいう「交易港」の分析に重点を置き、「外国人との距離（≡他者との共生）」をどのように扱ったか、都市部との間隔、囲壁や市場の存在などを分析視点とする。長崎については、出島オランダ商館の設定（1641年〈寛永18〉）や唐人屋敷の築造（1689年〈元禄元〉）をみることで、日本型の近世港湾都市が完成したと論じたい。

結論として、長崎は、近世日本における外来文化との接点ではあるが、政策的に十分な国家管理がなされた交易港であり、「港市」や「共生」というほどには、開放性、国際性には富んでいなかったと考える。

しかし、これは「共生」の否定を本意としていない。むしろ、長崎の歴史を、過去に稀なる「開放的」「国際的」と安易に語り、ユートピアのように仮託することこそ危険である。文明の共生には、①自然環境との共生、②国際的な人類の共生、③将来世代との共生があるという。本発表の目的は、リアルな長崎の姿態を語ることで、よき知識の伝達という「③将来世代との共生」を目指すことにある。

「潜伏キリシタンのイナッショ(イグナティウス・デ・ロヨラ)崇敬」

島由季

(大浦天主堂キリシタン博物館 学芸員)

日本においてキリスト教が禁止されていた時代、寺檀制度や絵踏みによってキリシタンはいなくなるとされていたが、密かに信仰を守り続けていた人々も存在した。彼らのことを潜伏キリシタンと呼ぶ。潜伏キリシタンは、禁教下という特殊な状況で、独自の信仰形態を用いることで信仰を継承してきた。そのなかでも特徴的なものが、「オラショ」と呼ばれる祈りの言葉と、神仏像をはじめとするキリスト教とは無関係な像を、キリスト教の神や聖人の代替とする「見立て」信仰である。

本発表は、イエズス会創始者のひとりで、潜伏キリシタンから「イナッショ」として崇敬されていたイグナティウス・デ・ロヨラ(1491-1556)のオラショと見立てに関するものである。長崎県下、そして天草(熊本県)のいくつかの潜伏キリシタン組織には、イナッショのオラショが残されており、長崎の外海地域においては、イナッショと名の付いた像が継承されてきた。

イナッショのオラショは、ロヨラの列福もしくは列聖に際して宣教師側が作成もしくは日本語訳した祈りであると考えている。複数の地域ではほぼ同じ文言のオラショが残っているという事実から、潜伏期にキリシタンが独自に作成したとは考えにくい。また、長崎においてロヨラの列福を祝う式典が行われたことや、オラショの内容をみても、宣教師(イエズス会)の布教が関わっている可能性が高い。

潜伏期には、キリシタンであることが発覚し捕縛・処分される事件が数度起こっているが、その際の事件調書が残されている。調書にはキリシタンたちの信仰実態が記載され、「イナッショ」という像を所持する者がいたことが確認できる。

また、キリスト教解禁後も潜伏期の信仰形態を維持するかくれキリシタンの資料は、本研究において大変貴重であり、潜伏期の信仰形態を検討する際の参考となる。潜伏期から現在にいたるまでオラショと見立て像を守り伝えてきたという事実は、キリシタンにとって、ロヨラの存在が重要であったということを意味している。

本発表においては、イナッショを例にオラショや見立て像をともに検討することによって、潜伏キリシタンたちの聖人崇敬や、信仰の実態をより明らかにすることを目的とする。

《聖福八景図詩巻》に見る 17 世紀末の日中文化交流

—忘れられたはざまの世代について

長岡枝理

(長崎歴史文化博物館 研究員)

長崎市内の黄檗寺院である萬寿山聖福寺に所蔵される《聖福八景図詩巻》(以下、本巻)は、延宝5年(1677)の聖福寺開創を祝って寄せられた詩文集である。同寺の開基である鉄心道胖(1641~1710)が撰した「聖福八景」の景観を得て、その韻字に拠った奉和詩十二編が記された紙を継いだ卷子状の書詩巻となっている。本巻の詩の内容については、すでに先行研究によって詳細な分析がなされており、詩を寄せた多くが長崎には渡来していない中国人であり、その多くが海を越えて詩が届けられたと考えられている。

一方で巻頭を飾る「聖福八景」の題字、およびそれに続く八景を描いた絵については、これまで詳細が紹介されることはなく日中交流史および美術史等の分野においても注目されることがなかった。題字、および聖福八景図を描いたのは記される款記から童立山という中国人であることが分かっている。更に八景には「丙寅秋日」の年記があり、貞享3年(1686)の制作ということが判明する。八景図は墨色を基本としつつ、淡彩を用いた描法でいわゆる「南宗画」に分類されるものと言える。中国で元時代に文人と言われる人々を中心に流行した描法が日本へ本格的に伝えたのは長崎へ渡来した来舶清人・伊孚九と言われている。伊孚九の最初の来日は享保5年(1720)年で、本巻の制作よりかなり後年であり、本巻の八景図は日本への南宗画伝来の最初期例に当たる可能性が高い。

本発表ではまず本巻に収録される題字および画の考察、および作者である中国人、童立山についての情報を整理する。童立山とならんで本巻や聖福寺伝来の他の資料には、同年代の中国人たちの名前が多く確認できるが、いずれも現在の研究ではほとんど取り上げられることがなかった。しかし、呉禎など中には童立山と同じく絵を描いている者も確認されるなど当時の中国の文化を日本へもたらした人物たちが聖福寺周辺に多く存在していた様子をうかがうことが出来る。当時の中国文化が通説よりも早く伝来していた可能性の提示とともに、この時期の中国人たちの存在が忘れられている要因として、最初期に長崎へ渡来し帰化した「住宅唐人」と呼ばれる明人たちと、唐人屋敷設置後に来崎した「来舶清人」と呼ばれる清人たちの、ちょうど「はざま」に当たる世代であることに着目し、その背景にある日中間の外交政策に翻弄されながらも続けられた長崎における日中の文雅な交流について考察を行う。

大会 3 日目 個人研究発表 プログラム

部会 1 座長：加藤久典		会議室 108 11:35~12:20
Lynn Rhodes	11:30-11:35	Introduction of the International Society for the Comparative Study of Civilizations.
Michael Andregg	11:35-11:55	The World has not Learned the Most Important Lesson of Nagasaki: Review of the Current Status of Nuclear Weapons and Arms Control.
Shunichi Miyajima	11:55-12:15	Comparative Religion and Comparative Civilization: Can Help Build a Peaceful Civilization?

部会 2 座長：吉田晃章		会議室 108 13:30~15:30
岩松文代	13:30-14:00	西洋がとらえた東洋の植物と文明 -訪日外国人による竹の発見と伝達-
赤坂信	14:00-14:30	世界遺産に隣接して計画されている洋上風力発電施設(西海市江島周辺)が示す問題の所在
篠原典夫	14:30-15:00	「施餓鬼」にみる近世東アジアの信仰
三浦伸夫	15:00-15:30	ニュートンの比較文明論

部会 3 座長：大森一三		会議室 105 13:30~16:00
深堀彩香	13:30-14:00	歌オラショ《ぐるりよぎ》の欠落部に関する一考察
安達未菜	14:00-14:30	国家間のエスニシティとアイデンティティの一考察
佐野仁美	14:30-15:00	人智の大移転—情報文明と翻訳—
小林雅博	15:00-15:30	人新世における「希望」の概念について
小川晃生	15:30-16:00	G・ホフステッドの比較文化研究に基づいた E・トッドの人類学的システムの再検討

部会 4 座長：吉野浩司		会議室 109 13:30～16:30
吉野浩司	13:30-14:00	「〈善く生きる〉ための社会学とは」
サヤナ・ミトポヴァ	14:00-14:30	「ロシア人たちの社会学・革命・亡命」
中辻柚珠	14:30-15:00	「チェコスロヴァキアにおける亡命ロシア知識人のネットワーク」
阿毛香絵	15:00-15:30	「G. ギュルヴィッチと G. バランディエとフランス社会学」
吉田耕平	15:30-16:00	「未来は共同で描かねばならない——ニコライ・ティマシェフ、亡命の半世紀、そして回帰する社会動態論」
梅村麦生	16:00-16:30	「亡命知識人における知識と知識人の意義——テオドール・ガイガーの場合」

部会 5 座長：金子晋右		会議室 110 13:30～16:30
林正博	13:30-14:00	極東親子文明の存在と日本
川口文夫	14:00-14:30	「人類共生の文明社会を求めて」
犬塚潤一郎	14:30-15:00	ルネッサンス都市から現代 AI まで:公共性の存在論的探求
鎌田出	15:00-15:30	吉田松陰諸国遊歴の第一歩～長崎で見たものは何か～
三枝守隆	15:30-16:00	250年間の徳川の平和 (Pax Tokugawica) を実現させた鎖国政策——共同研究: 『歴史の研究』における「日本に関する悉皆調査」の中間報告
筒井正二郎	16:00-16:30	江戸時代の医薬 -長崎で学んだ藩医と、売薬商人の活動について-

The World has not Learned the Most Important Lesson of Nagasaki: A Review of the Current Status of Nuclear Weapons and Arms Control

Michael Andregg, St. Paul, Minnesota, USA
mmandregg@gmail.com

In my opinion, the primary lesson of Nagasaki, Japan, for the world is that nuclear weapons should be reduced to zero, or very near zero, if human civilization is to survive in the long term.

The number of nuclear weapons on earth peaked around 1985 at about 61,662 functional warheads held by 8 countries (USA, Soviet Union, China, UK, France, India, Pakistan, and Israel). Citizen opposition to an apparently endless arms race in the early 1980's led to government actions that decreased the total inventories in mainly the USA and the Soviet Union.

That led to a low point of about 13,400 active (deployed or deployable) and reserve nuclear warheads in 2023 maintained by 9 nations now including North Korea. Today, I regret to say, every nuclear weapons nation is modernizing their deployable inventories. Furthermore, Nuclear Arms Control has been shredded by adverse decisions by both the USA and Russia.

The rest of this sad story is details that follow.

Title: Comparative Religion and Comparative Civilization
— Can Religious Studies Help Build a Peaceful Civilization?

Shunichi Miyajima, Hokkaido-university
miyajima@let.hokudai.ac.jp

All disciplines can be tools for peaceful civilization-building, but they can also be tools for destroying civilization. In this presentation, I would like to consider the possibilities and limits of religious studies, using the example of Friedrich Heiler (1892 - 1967), a German religious scholar and theologian.

Heiler is best known for his study of prayer ("Das Gebet," 1917). He is a Catholic by birth. However, he opposed the papal-centrism and anti-modernism of the Roman Catholic Church and approached the Protestant Church. He took a position that was neither Catholic nor Protestant. During the Weimar Republic, he became involved in the Christian ecumenical movement (movement for church unity). However, it did not become a major movement. After World War II, he tried to promote dialogue not only among Christian denominations but also among various religions. He also visited East Asia, including Japan. He saw religious studies as a means of peacebuilding. For example, after World War II, Heiler was active in the International Society for the History of Religions, which received support from UNESCO. But the practical role of religious studies was denied in the late 1960's and 70's. Religious studies came to be considered to be an objective, value-neutral humanities science.

Religious studies cannot be religion. Many religions preach the need for peace, but if a religious scholar only preaches peace, like Heiler that scholar is practicing religion—here, religious studies become religion. Therefore, for religious studies to be useful in creating a peaceful civilization, they must be scientific. It is incumbent upon religious scholars to discuss religion in empirical and scientific terms. However, religion is a very human activity, and little of it can be explained scientifically. We religious scholars must be aware of this. Religious studies have their limitations.

西洋がとらえた東洋の植物と文明—訪日外国人による竹の発見と伝達—

岩松文代（北九州市立大学文学部） fumiyo@kitakyu-u.ac.jp

植物は、食料、資材、燃料などをはじめ、人類の生存や豊かさに不可欠な役割を果たし、文明の盛衰に大きく関与してきた。そして、古来、世界中に様々な植物が伝播し、渡来した水田稲作が日本の文化の根幹となったように、植物の交流が他地域の文化に大きな影響を与えることもあった。

本報告では、西洋には基本的に自生しておらず、東洋の文化を支えてきた有用植物である竹の伝播に着目する。そして、西洋が東洋（日本）の文明や文化と出会った初期の出島の時代から明治時代にかけて、訪日外国人らが初めて日本の竹に接触した際に発見して、西洋に伝達した竹の利用法、知識、母国への導入の期待などを、彼らの記録をもとに明らかにする。そのうえで、近現代にいたる西洋での竹との関わりの経緯をふまえつつ、竹という東洋の植物と西洋との交流史について、文明の視点から考察を行う。

タケ類には、南米やインド、東南アジアに広大に生育する熱帯性の種、日本や中国中南部を含む東アジアを中心に世界各地にも分布する温帯性の種がある。東インド会社は、熱帯、温帯のタケ類の生育する地域を広く航海したことになる。出島に上陸したオランダ東インド会社のケンペル、ツェンベリー、シーボルトらは、日本人の生活や旅で使われる竹の道具や竹林を観察し、知識を伝えた。その後、開国前後では、イギリスの駐日外交官であるアーネスト・サトウ、A. B. ミットフォードらが竹栽培を学んだ。アメリカの動物学者モースは竹の万能ともいえる有用さに注目し、アメリカ農務省は自国へ導入することを強く望んだ。訪日した彼らは、竹工芸品や竹の乾燥標本、そして生きた竹を出島や横浜港から西洋へ移出した。それらは植物園や庭の園芸の鑑賞用植物となり、日本の竹は文化的に伝播した。西洋で竹への愛好を生み出したが、農業や林業に資する作物生産への発展は途上であり、西洋に土着する新たな竹文化を大きく創出したとはいえない。西洋では竹は栽培しづらく、また竹は開花周期が長い（120年周期など）品種改良が進まず、西洋への移入栽培は進展しづらかった。

現在、外国人観光客が京都の嵯峨野の竹林に日本らしさを感じるのには、西洋人にとって竹がエキゾチックな植物だからともいえよう。またアジアの観光客も名所とみているが、嵯峨野の竹林の多くを占めるモウソウチクは、江戸時代に中国から日本へ渡来した種である。つまり、東アジア圏域では歴史的に竹文化が交流しており相互に根付いているが、日本から西洋に渡った竹の文化は、西洋諸国では主に外来文化の位置付けにあることが指摘できる。

竹は森林とは異なり伐竹が管理になるため、竹林破壊という言葉が使われないほど速やかな再生が可能である。将来、品種改良が進み、何らかの技術により竹が必要とする気温、降水量や、地形、土壌などの環境条件が克服されたとき、東洋の竹が西洋文化のしくみに入り込み、さらには西洋の文明に関与する可能性があるかもしれない。

世界遺産に隣接して計画されている洋上風力発電施設(西海市江島 周辺)が示す問題の所在

赤坂 信 (千葉大学名誉教授)

makotoakasaka1@gmail.com

景観とは人間の営為の結果であり、それは文明の姿といってもいいのではないか。かといって、すべて容認というわけではない。景観の保護思想は近代という巨大な破壊の過程(戦争によるものを含む)を経て生まれてきたものだ。世界遺産とて戦後の産物である。何かの保護の手段をもって、大切なものを破壊から守ろうとしてきた。

近年、地球規模の環境問題に対応すべく、再生エネルギー開発が日本国内の陸上、洋上に進展しつつある。ただ開発規模として、かつてないほどの巨大施設群が計画されているにもかかわらず、地元への情報公開も進まず、プロジェクトの円滑な進行を最優先している状況がある。これまでのリゾート開発から現代における景観問題を概観しつつ、地元長崎県において進められている大規模開発に着目したい。とくに世界遺産「長崎と天草の潜伏キリシタン関連資産」(登録2018)をもち、その世界遺産を構成する地点に隣接して計画されている巨大な洋上風力発電施設を事例に、「望ましい文明の姿か」を議論のテーマとしたい。

「施餓鬼」にみる近世東アジアの信仰

篠原典生（中央大学総合政策学部）

shinohara.017@g.chuo-u.ac.jp

「施餓鬼」とは餓鬼道に落ちて飢えや渇きに苦しむ靈魂に食事を施して供養する法会であるが、日本では盂蘭盆会と混同され先祖供養と合わせておこなわれることが多い。現在では各寺院や宗派のホームページなどでもそれぞれの成り立ちを紹介してその違いを説明しているが、一般には墓参に代表される先祖供養が盛んで、施餓鬼を主とした法会はあまり見られない。ところが中国や東南アジアなどでは現在でも施餓鬼法要が盛んにおこなわれている。台湾や東南アジア地域の施餓鬼法要については様々な報告があり、また北米地域の中国系寺院でも重要な宗教行事として施餓鬼法要がおこなわれており、近年はオンラインでライブ配信をしている。

本報告では中国山西省五台山にほど近い宝蔵寺観音殿に残された施餓鬼に関する壁画の一例を紹介する。五台山は文殊菩薩の道場として知られる仏教の聖地であり、宝蔵寺も由緒正しい仏教寺院である。宝蔵寺観音殿には左右壁と奥壁いっばいに壁画が描かれている。観音菩薩による救済の場面のほかに、地獄の十王殿や西遊記など、一見すると観音信仰とは関係なさそうな題材も多く、またその中心に描かれているのもよく知られているような観音菩薩の姿ではなく、異形の老人である。報告者は観音殿に描かれた壁画の内容を詳しく読み解くことにより、一見無秩序に思える宝蔵寺観音殿壁画が「施餓鬼」を主題としており、観音信仰によって統一されていることを発見した。宝蔵寺観音殿壁画を手掛かりに中国近世の「施餓鬼」思想を概観し、そこから中国の死生観を探り、それが現代までつながる文化、社会に与えた影響を考えるきっかけにしたい。また、長崎の唐寺にも見られるような「仏教」という枠組みだけではとらえきれない東アジア近世の「信仰」の豊かさを明らかにしたい。

ニュートンの比較文明論

三浦伸夫

miuranob@kobe-u.ac.jp

万有引力の法則発見で著名なアイザック・ニュートンは、17世紀から18世紀にかけての第一級の数学者・天文学者であったことはよく知られている。

他方で彼は、キリスト教神学、錬金術、年代学などを熱心に研究していた。ニュートンは学生時代から年代学に関心を持ち、近代科学誕生を告げる書として著名な主著『プリンキピア』（1687）を執筆する傍ら年代学の研究を続け、死の直前までその研究に打ち込んでいた。

ニュートンが生前中での出版物は数少ないが、その中に『簡略年代学』（1725年、ただしニュートンの同意なく、しかもフランスで出版）がある。さらに没後すぐに出版されたのは『古代諸王国の修正年代記』（1728）で、それは各国語に翻訳され、18世紀西洋世界各国で広く迎えられた（ただしその後は忘れ去られてしまう）。年代学はニュートンの重要な研究分野の一つと言って過言ではない。

近年それを記述したノート類が徐々に公開され、その研究内容がさらに詳しく知られるようになってきた。ニュートンにとっての年代学とは、聖書の記述に見られる事件や古代王国などの年代を、自身の打ち立てた天文学理論をもとに確定する研究分野であった。ニュートンは自身のキリスト教の立場から独自の年代設定をし、そのためニュートンの成果は今日の歴史学や聖書学のそれとは異なることは言うまでもない。そのことを留保するにしても、聖書には古代エジプト、バビロニア、ユダヤ、ギリシャなど地中海各地域の文明の記述が数多く見られるため、ニュートンによるその記述には古代文明間の比較が見て取れる。したがって比較文明の歴史研究においてニュートンの仕事は記憶に留めておくべきではないか。

本発表は、ニュートンの年代学を紹介するとともに、その記述に見られる比較文明的視点を通じて、さらに17-18世紀西洋が古代地中海文明をどのように見たのかを明らかにする。なお当時、年代学では古代の暦などを用いるのが普通であったが、ニュートン自身はその記述にキリスト誕生を初年とする西暦を初めに用いている。今年2023年は日本で西暦を用い始めて150周年記念の年である。

歌オラシヨ《ぐるりよざ》の欠落部に関する一考察

深堀彩香（愛知県立芸術大学）

fukahoriayaka@gmail.com

長崎県の北西部に位置する生月島（長崎県平戸市生月町）のかくれキリシタンによって口伝されてきたオラシヨの中には、祈りの言葉に旋律が付された「歌オラシヨ」と呼ばれるものがある。聖歌に由来する「歌オラシヨ」は、現在、《らおだて》、《なじょう》、《ぐるりよざ》の3曲が継承されており、《ぐるりよざ》は山田集落と壺部集落の双方において共通して歌われる唯一の歌オラシヨである。したがって、《ぐるりよざ》によってのみ音楽的アプローチという観点から集落間の比較を行うことが可能となる。しかしながら、生月のかくれキリシタンは集落ごとに組織を形成しており、長い間、集落間での信仰上の接触がほとんどなかったため、オラシヨや歌オラシヨの変容の仕方も集落によって大きく異なっている。

歌オラシヨ全3曲の原曲は、キリシタン音楽研究の第一人者である皆川達夫氏によって推定されている。《ぐるりよざ》について、彼はまず、両集落のものが同一の聖歌を起源とすることを立証し、その後、その原曲がスペインのローカル聖歌《O gloriosa Domina（栄えある聖母よ）》であると推定した。そして、歌オラシヨの歌詞とラテン語歌詞との同定を試み、その中で山田集落の《ぐるりよざ》には歌詞に大きな欠落箇所があると指摘したが、この時、彼は歌詞の比較しか行っていない。

そこで本発表では、これまでの皆川氏の解釈をおさえながら、歌詞だけでなく、音楽（旋律）にも着目し、山田集落における《ぐるりよざ》の欠落箇所について再考を試みる。山田集落と壺部集落の《ぐるりよざ》、および《ぐるりよざ》の原曲とされる“O Gloriosa Domina”の歌詞と旋律を比較分析し、欠落箇所に関する新たな可能性を示したい。歌オラシヨ研究は皆川氏の功績によるところが大きいですが、これまで他の研究者によって議論されることはほとんどなかった。オラシヨは口頭伝承のため資料が限られている上に、現在はかくれキリシタンの信仰の継承自体が危ぶまれている。こうした状況を考えると、研究対象とするには難しい点も少なくないが、本研究を通して、歌オラシヨ研究の今後の展望や可能性についても模索していけたらと考えている。

国家間のエスニシティとアイデンティティの一考察

安達未菜（東海大学 文明研究所）

am178617@tsc.u-tokai.ac.jp

「あなたの心を優しくするものはすべて女性から生まれ、女性に似ている。芸術や科学における理想も、私たちの目には常に女性的な形に映る。それゆえ、擬人化された象徴的なインスピレーションであるミューズたちが存在する。古代ギリシア・ラテン (heleno-latinas) それ自体を本性とする我ら地中海民族 (nuestras razas mediterráneas) の永遠の異教では、私たちは女神と一緒にいるときのみ神を理解する。セム的な一神教は、虚栄に満ちた孤独な神であり、永遠の彼方に失われた神である。」

一八九三年一月、カステラル (Emilio Castelar y Ripoll : 1832—1899 年) によって「理想」(Ideal) という題目で書かれた論考の一節である。一八五一年にコンコルダ条約が締結されて以降の政教関係に対する批判と信仰の自由を侵すカトリック教会への批判が書かれているのであるが、ここにはカステラルの考える民族の範囲が見てとれる。すなわち、古代ギリシア・ラテンを基盤とする「地中海民族」である。

一九世紀の国民国家の形成期にあって、カノバスは内政において民族の統一をもたらしたとされるが、カステラルの論考からはスペインのそれとは異なる民族の様相が見てとれる。エスニシティとアイデンティティをナショナリズムの視点から再考し、カステラルらのことばを検討する。

人智の大移転—情報文明と翻訳—

佐野仁美

(慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科、サイバー文明研究センターメンバー)

hitomi_sano@keio.jp

現在は情報文明の転換期にあり人間のあらゆる智が翻訳され急速に物理空間から情報空間に転写されている。知識の共有、交換、伝達が行われる空間こそ新文明の震源地になる。ここでは人智が情報空間に大移転している現象を大翻訳活動として過去の文明の翻訳と比較することで情報文明の起源をかつてない観点から議論する。

文明の隆起と翻訳活動は切り離せない関係にある。近代科学の源流にある古代ギリシャの人智はアレクサンドリアで精密化し、それを吸収したアラビア世界では東方世界の知識と融合し独創性を高めた。アレクサンドリア図書館以来の研究機関であるバグダードの知恵の館では各世界から集まった知識の大翻訳活動が行われた。これらの知識はやがてヨーロッパ大陸に流れさらに翻訳が重ねられる。この様に大陸を移動しながらゆくりと繰り返された翻訳活動は科学革命、近代西洋科学文明を導く。また、東洋でも西洋文明の移転を進めた福沢諭吉の活動の中核にも翻訳があった。

情報文明以前での翻訳は、人間の言語文字間のみでの限定的な翻訳しかあり得なかった。情報文明の翻訳には、人間のあらゆる智(言語文字だけでなく音声や映像を含む)と機械言語間の翻訳、そして機械言語間の翻訳が加わる。世界中に散らばった機械が同じ言葉を話すとは限らず、人智の翻訳の効率化のためには、機械言語(プロトコルや文字コード)の標準化や相互運用性を高めることが必須である。機械の言葉を階層状に積み重ね、様々な機械言語を組み合わせるプロトコルスタックとアルゴリズムにより人間の知識を媒介する。これはグローバルな共通言語空間の創造であり、これを広義なインターネットと呼ぶことができる。

人間の目に見えず実感を伴わないほど瞬間的に翻訳されるため着目されない。しかし、情報文明の源流には、機械を介在した人間から人間への人智の翻訳に大変革がある。地球上の多言語に渡る文字だけでなく映像、音、感情的な情報までもが光の速度で地球規模に瞬間的に翻訳され、扱われる情報量は爆発的に増加している。情報空間に蓄積された膨大な知識から人間だけではなく機械も学習することは極めて特徴的である。

人間が生み出した新しい言語がインターネット空間を創造した。情報社会の人間は、機械言語を操った翻訳による新空間に存在する、同じ言葉を操る新民族だ。人類が初めて手にした誰しもが平等に感覚的に使いやすい共通言語の文明空間で一体何ができるのか、という認識は持てないか。

人新世における「希望」の概念について

小林雅博（神奈川工科大学、立教大学）

m1s0h0r8@yahoo.co.jp

人新世という新しい地質学的時代区分を表現する言葉が人口に膾炙するようになって久しい。

しかしながら、人新世という地質年代がいつ始まったのか、また、人新世の起源となる物質的指標は何であるのかなど、人新世の始原と根源をめぐる科学的議論はいまだに続いている。人新世の学術的定義をめぐる冷静な科学的議論が続いている一方で、人新世的気候現象の二つの特質、すなわち、豪雨と旱魃は今この時にも現代文明に容赦なく襲い掛かっている。この二つの特質が、技術的恩恵を所与のものとして生を営んでいる現代の人間に与えている影響は非常に深刻である。

比較文明学という学問の本質が、過去、現在そして未来における人間的生あるいは営為の総体を客観的に分析する学問であるとするならば、現代を生きる私たちが直面している人新世的気候現象は、まさに未来の文明と人間の生の本質を規定する決定的な非人間的要素と考えなければならない。しかしながら問題は、現代文明が人新世について思考するとき、そこに「希望」という極めて人間的な概念の存在があまりに希薄だということである。

本発表では、人新世に関する最新の科学的知見を踏まえた後で、私たちはどのような「希望」概念を練り上げていくことが可能なのかということについて、エルンスト・ブロッホの『希望の原理』などを参照しつつ検討していく。

G・ホフステッドの比較文化研究に基づいた E・トッドの人類学的システムの再検討

小川晃生（神戸大学）

atitotem@yahoo.co.jp

報告者はフランス出身の研究者 E・トッドが各社会の価値の共時的多様性を整理するために提唱した人類学的システム (Todd, 1983) の再検討に取り組んできた (小川晃生 2018, 2020, 2022)。この再検討において報告者はアメリカの社会学者 T・パーソンズの提唱した「主意主義的行為理論」を参照しつつ「人類学的システムの影響下での行為者の主体的行為選択の社会ごとの傾向の整理」に取り組んでいる。他方でオランダ出身の研究者 G・ホフステッドは多国籍企業である「ヘルメス社」の各国支社の社員に対して実施されたアンケート調査を解析することによって「各国の国民が有する価値の傾向」を整理した (Hofstede, 1980)。

本報告では上記のホフステッドの価値研究を参照することで上記の報告者の研究を改良するための論点を整理し、比較文明学に利用できる価値比較のモデルを構築することを目指す。ホフステッドはアンケート調査の多変量解析に基づいて価値の分析を行っておりその点で実証科学的に手堅い議論を行なっている。他方でホフステッドの分析は価値の通時的変化と共時的多様性をうまく区別できないという問題を有する。それに対してトッドは上述した人類学的システムを提唱することで上記の区別を体系的に示したが、前近代家族システムと現代の価値とを接続する議論は実証科学的妥当性の点から論争を呼んでいる。トッドの研究を参照した報告者のこれまでの研究をホフステッドと対話させることで、トッドとホフステッドの両者が持つ問題点を相対化して比較文明学的な価値研究の前進に貢献することが期待される。最後になったが本報告にあたって JSPS 科研費 (課題番号:20K22212) の支援を受けている。

引用文献

Hofstede, G., 1980, *Culture's consequences: international differences in work-related values*, Beverly Hills, Calif: SAGE Publications

小川晃生, 2018, 「価値・規範を中心とした社会システム理論の再生のための比較文明的な研究—パーソンズ社会学とトッド人類学の接続を基調として—」神戸大学大学院人文学研究科博士学位論文 神戸大学学術成果リポジトリにて本文公開済み

———, 2020, 「パターン変数による人類学的基底の書き換えについての—論考—ゲマインシャフト・ゲゼルシャフト概念を参照して—」『21世紀倫理創成研究』13:pp. 40-53

———, 2022, 「E・トッドの「人類学的基底」概念の主体的行為選択としての書き換え——「普遍主義」を軸として——」『比較文化研究』146:pp. 15-25

Todd, E., 1983, *La Troisième planète*, Paris: Éditions du Seuil

〈善く生きる〉ための社会学とは

吉野浩司（鎮西学院大学現代社会学部）

yoshino@wesleyan.ac.jp

本報告は、「〈善く生きる〉ための社会学の基盤構築：亡命知識人の一次資料の国際共同学術調査」（基盤研究(B)19H01585）の成果発表を、代表者および協力者で、合同で行うものである。〈善く生きる〉のための社会学とは、人間が生きる上で必要な生きがい、愛、喜びといった人間のポジティブな側面を対象とし、その発生メカニズムの解明と社会への実装とを目的とする科学である。この社会学を、亡命知識人論というグローバルな社会学史の観点から、その源流にまでさかのぼって捉え直そうとするものである。その片鱗は、20世紀初頭のロシア社会学にも組み込まれており、亡命知識人たちの手により、後に欧米の社会学にまで持ち込まれていった。発表者および題目は、下記のとおりである。

- ・吉野浩司「〈善く生きる〉ための社会学とは」
- ・サヤナ・ミトオポヴァ「ロシア人たちの社会学・革命・亡命」
- ・中辻柚珠「チェコスロヴァキアにおける亡命ロシア知識人のネットワーク」
- ・阿毛香絵「G. ギュルヴィッチとG. バランディエとフランス社会学」
- ・吉田耕平「未来は共同で描かねばならない——ニコライ・ティマシェフ、亡命の半世紀、そして回帰する社会動態論」
- ・梅村麦生「亡命知識人における知識と知識人の意義——テオドール・ガイガーの場合」

ロシア人たちの社会学・革命・亡命

Sayana Mitupova (サヤナ・ミトオポヴァ)

Russian Academy of National Economy and Public Administration
(RANEPА)

mitupova-sa@ranepa.ru

本発表では、ロシア社会学の起源と発展、そして終焉＝世界への拡散について
のべる。

ロシアの科学的社会学は、法学者の力によって、サンクト＝ペテルブルク、モ
スクワ、カザン、キエフの大学において導入された。代表的な学者は、ニコライ・
コルクノフ、マクシム・コヴァレフスキー、ユーリ・ガンバロフ、レオ・ペトラ
イツキーなどで、彼らはロシアの大学において社会学のコースを設置した。

高等教育機関としては、ロシア社会科学高等学校が、パリの万博博覧会の展示
の一環として設立された。その学長は、精神科医兼社会学者であったウラジーミ
ル・ベフテレフであった。サンクト＝ペテルブルクの精神神経学研究所では、社
会学のコースとロシア初の社会学教授職が設置された（1908年）。

次にロシア社会学の 3 つの主要な段階について述べる。ロシアの社会学は下
のような展開を示した。①建設的な西洋化 constructive westernization／②悲
観的な西洋化 pessimistic westernization／③草の根の傾向 grassroots soil
tendency。

しかし革命によって、社会学の発展は阻止されたが、亡命知識人らの手により、
ロシアの社会学は世界の社会学の中に浸透していくことになる。

チェコスロヴァキアにおける亡命ロシア知識人のネットワーク

中辻柚珠（京都大学大学院文学研究科）

dolly3205@gmail.com

チェコスロヴァキアへの亡命ロシア人の数は、他国への亡命者に比べて相対的に少なかった。それにもかかわらず、チェコスロヴァキアの首都プラハは亡命ロシア人の学術的・文化的な最重要拠点の一つとなり、「ロシアのオックスフォード」と呼ばれる知的環境が形成されることとなった。なぜ大戦後誕生したばかりのチェコスロヴァキアという若い国家が、そのような重要拠点の一つとなり得たのだろうか。

その要因として大きかったのが、政府主導で進められた「ロシア人支援活動 Ruská pomocná akce」であった。1921年に始まった本プロジェクトは、若い世代のロシア人移民の教育、その教育を担う教師、および学者、作家、ジャーナリスト、芸術家といった知的エリートを主たる支援対象とした。これらの支援は、純粋に人道的な動機だけでなく、チェコスロヴァキアという誕生したばかりの国家の立場を確立させたいという政治上の動機とも不可分であった。

亡命ロシア知識人の拠点となりうる施設は複数存在した。中でも代表的であったのが、ロシア人民大学（後に改称してロシア自由大学）とロシア法学部である。これらの機関では、アレクセイエフ、ソローキン、ティマシェフ、ヤコブソンといった名だたる知識人が講義を担当していた。

プラハはチェコスロヴァキアに限らず世界中に亡命したロシア知識人全体にとってのネットワークの拠点でもあった。例えば、在外ロシア学術団体会議の第1回と第2回はプラハで開催されている。この費用はロシア人支援活動によって賄われた。また、在外ロシアコミュニティの教育省の代替物として、1923年にプラハで教育局が設立された。教育局は、ヨーロッパの移民受け入れ国における移民学校の代表を務めるとともに、それらの組織・発展に努めた。その他にも、ロシア人移民の学校システムを組織するための諸機関は、プラハに本部を置いていた（在外ロシア教師団体連盟、種々の教育学雑誌の編集部等）。

以上の通り、プラハは亡命ロシア知識人にとって、豊かな知的環境を育んでいくための一大拠点であった。ここを足掛かりに、亡命知識人らの知の蓄積は、さらに西へと渡っていったのであった。

G. ギュルヴィッチと G. バランディエとフランス社会学

阿毛香絵（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）

kaeamo@protonmail.com

ギュルヴィッチと 20 年以上にわたり共同をともにしたジョルジュ・バランディエは、「ギュルヴィッチは決して一つところに留まることをしなかった。それは彼自身の選択でもあったし、彼の生きた世紀の変動に彼自身が深く関わっていたからでもある」と述べている。ギュルヴィッチは、彼自ら変動の時代を生き、理論やシステム、全体主義といった型にはまった組織や「学派」に対して、あるいは知識の停滞や定型化に対して、きわめて批判的であった。学際的、国際的な活動を展開する知識人としてのギュルヴィッチの態度は、次の世代を担うことになる、フランス人の社会学者、人類学者達に大きな影響を与えた。

特にアメリカからフランスに戻ったのち、1946 年にギュルヴィッチが創始した『国際社会学誌 (Cahiers internationaux de sociologie)』で活躍した数多くの学者たちがいた。マルクス主義社会学者として知られるアンリ・ルフェーヴル、世界史研究に大きな変革を起こすこととなるフェルナン・ブローデル、イスラーム学者でありアルジェリアの脱植民地化の歴史に深くかかわったジャック・ベルク、精神社会学、ラテンアメリカ研究で活躍することになるロジェ・バステード等。

これらのフランス知識人のそれぞれの専門分野やその後の活躍の方向性を見ると、ギュルヴィッチが決して学問的、学術的枠組みを固定化させることなく、学際的な広さをもった社会科学の展開を目指していたことがうかがえる。こうした特徴を特に戦後のフランス社会学、文化人類学の現場において適応することに成功した一人が、ジョルジュ・バランディエであった。彼は「植民地の状況 Situation Coloniale」を多角的な観点から説明することにより、当時のアフリカ社会を分析した（『黒ブラザビルの社会学』『黒アフリカの現在の社会学』）。

バランディエはギュルヴィッチの社会学を「自由の社会学」と、位置づけ、そこで定義される自由もまた社会の複雑な要因の中で相対的なものであることを論じた。バランディエが独立を果たしていく当時のアフリカ諸国における社会科学の発展に自ら関わり、現地で活躍していく知識人や研究者の育成に携わりながら、決して学派や理論を強要しなかった姿勢は、フランスの学术界に「アウトサイダー」として根を下ろしつつ、計り知れない貢献をしたギュルヴィッチのフランスとフランスの学术界に対する関わり方との類似点が見いだせる。ギュルヴィッチとバランディエらの師弟関係は、ロシアから亡命した一人の知識人の思想と学問が、フランスの人類学の中に浸透していった、ひとつの理想的な事例として挙げるができる。

未来はともに描かねばならない ニコライ・ティマシェフ、亡命の半世紀、そして回帰する社会動態論

吉田耕平（鎮西学院大学 現代社会学部）

yoshida@wesleyan. ac. jp

本研究の目的は、ロシア出身の亡命学者ニコライ・ティマシェフの思想発展をあとづけることで、「善く生きること」が可能であるような社会の構想を読み取ることである。ニコライ・セルゲイヴィッチ・ティマシェフ（Никола́й Серге́евич Тима́шев；1886 - 1970）はロシアのサンクトペテルブルクに生まれ育ち、法学者として身を立てようとした人物である。ところがその矢先にソヴィエト体制から追及を受けて国外に亡命することを余儀なくされ、欧米各地を経てニューヨークに身を落ち着ける。第一線の研究成果により、法社会学の創設者ならびに初期ソ連史の先駆者として知られているティマシェフであるが、じつは、1910年代のロシア時代に刑法史の研究を打ち立てたこと、そして1960年代に壮大な社会学説史を素描したことで著名である。これら一見関係のない生涯の歩み、すなわち初期のロシア時代から亡命後のアメリカ時代、そして最晩年における業績には、一貫したテーマはあったのだろうか？ 本研究で明らかにするのは、そこには、波乱万丈の亡命期を通じてその内容を大きく変えるとはいえ、この50年間には、ティマシェフ独自の社会動態論（social dynamics）が横たわっているということである。たしかに最初期の考え、すなわち社会はおのずと発展していく、という社会像は、波乱万丈の亡命期を通じてなりをひそめていく。しかし、1940年代に法および国家体制の静態学的な理論を構築した彼は、1950年代、1960年代を通じてふたたび社会の動態について論じ始める。その間、壮大な社会学史を執筆し、さらに、イタリアのカトリック思想家ルイージ・ストルツォの社会学理論を読み解くことを通じて、ティマシェフは「未来はともに描かねばならない」という骨子をもつ社会観にたどり着いた。それは、ひとはひとりでは社会を作れないという原則に立ち戻る社会論であった。複数の、互いに異なっている人間たちが、一緒になって共通の未来を描き出すことを通じてはじめて社会は現れる。そして、このような共同の過程こそが社会を本当にかえていく——前へ、前へと進んでいく——原動力となるのである。このような考えの中には、苦難の亡命経験を潜り抜けてティマシェフが獲得した「善く生きる」社会の原型——絶対には欠くことのできないすべての社会の条件——が読み取れる。このような歩みは、20世紀にロシアおよび他の地域から亡命生活に踏み出していった知識人たちのあいだで多かれ少なかれ共通にみられるものだったのではないだろうか。このような検討を通じて、亡命知識人の思想から「善く生きる」ことの意味をひもといていく道筋について考察したい。

亡命知識人における知識と知識人の意義

——テオドール・ガイガーの場合

梅村麦生（神戸大学大学院人文学研究科）

umemuramugio@gmail.com

「—1943年の秋、私はどうしても占領下にあったデンマークでゲシュタポからの追究を避けねばならなかった。そして多くの同郷人と同じように、禁を犯してスウェーデンに赴いたのである。1943年11月、私がウプサラ大学で行った歓迎講義で、本書に述べてあるテーマと似たテーマで講義をしたが、そのとき、ストックホルムのヴァーシュトローム・ヴィドシュトランド書店から、ヨーロッパ社会におけるインテリゲンチヤの機能と立場について、簡単に判り易い本を書いてくれないか、という要請があった。……このテーマは、戦後アクチュアリティを失ったというよりも、むしろ得ているものである」（Geiger [1944]1949: V=1953: 3-4）。

ドイツ・ミュンヘン出身の社会学者テオドール・ガイガー（1891-1952）は、「群衆とその行動」（1926）や「社会性の諸形態」（1928）などの研究でその名を知られるようになり、ワイマール共和国時代に台頭したカール・マンハイムらドイツ社会学の「新しい波」の一人にも数え入れられている。しかし1933年にナチス政権が成立すると、かつて社会民主党員として活動していたかどでブランシュヴァイク工科大学の教授職を解職され、その後ただちにデンマークへ、そしてナチス・ドイツによるデンマーク占領時はスウェーデンに亡命した。北欧への亡命移住後もガイガーは社会学者として活動を続け、『インテリゲンチヤ』（1944）、『法社会学の予備的研究』（1947）、『るつぼのなかの階級社会』（1948）などの研究をデンマーク語やドイツ語で著し、1952年に急逝するまで北欧地域を代表する社会学者の一人であった。

そのガイガーについて、同時代には彼の諸著作が広く参照されていたものの、没後急速に読まれなくなり、「忘れられた古典家」となっていた。しかし1980年代以降、第二次世界大戦以前のドイツ社会学史や亡命社会学史の再考が進められていくなかで、重要な人物の一人としてふたたび脚光を集めるようになっていく。そこで本報告では、後年「実践的価値ニヒリズム」や「知的ヒューマニズム」を自称したガイガーにおける、亡命の経験と知識人論との結びつきについて、彼の後期の諸著作を素材として、かつ他の亡命社会学者の諸学説との比較を念頭に、検討する。

文献

Geiger, Theodor, [1944] 1949, *Aufgaben und Stellung der Intelligenz in der Gesellschaft*, Stuttgart : Ferdinand Enke. (= 1953, 鈴木幸寿訳『知識階級』玄海出版社.)

極東親子文明の存在と日本

林正博（東京都市大学 理工学部 電気電子通信工学科）

mhaya@tcu.ac.jp

発表者は2016年の比較文明学会大会において、騎馬民族征服説に基づき、以下の主張を行った。

1. 東ユーラシア系の騎馬民族が南朝鮮に侵入し、その後日本列島に侵攻、さらに戦いを経て大和朝廷を建国した経緯は、古代ギリシャ人が、いわゆる外的プロレタリアートとしてギリシャ半島に侵入し、その後地中海全域に植民、さらにポエニ戦争などを含む戦いを経てローマ帝国が成立した「古代ギリシャ・ローマ文明」の歴史と並行している。
2. つまり極東において、騎馬民族から始まり大和朝廷に至る古代文明が存在した。
3. ローマ帝国がゲルマン民族の侵入を経て崩壊し、新たに西欧文明が誕生したように、大和朝廷は東国武士集団の侵入を経て崩壊し、鎌倉時代以降新たに文明が誕生した。この新文明が今日の日本へと続く。
4. 極東におけるこれら新旧文明の関係は、トインビーの言うところの親子文明に相当する（以下、極東親子文明と呼ぶ）。

2020年の比較文明大会では、極東親子文明の存在を論証する上で騎馬民族征服説を文字通り認めずともよい（特に大和朝廷が騎馬民族由来である必要はない）ことを示した。

親子文明はトインビーの文明論において重要な概念であるが、これに対する彼の考察は、彼にとって馴染み深い「古代ギリシャ・ローマ文明と西欧文明（以下極西親子文明と呼ぶ）」の歴史に基づいており、彼の主張が他の親子文明で成立するかには疑問が残る。しかし、発表者が存在を主張する極東親子文明は我々にとって馴染み深いので、トインビーの主張が極西親子文明に特化していないかを我々が検証できると考え、実際に検証を行った。本発表では、この検証に基づき、以下の主張を行う。

- A. 建武の新政と明治維新はともに、トインビーの親子文明論で言うところのルネサンスと考えられるが、少なくとも明治維新は成功していることから、トインビーが考えるほどルネサンスを後ろ向きに捉える必要はない。
- B. 子文明が誕生するときに、内的プロレタリアート（一般大衆）を魅了した高等宗教（西欧文明の場合はキリスト教）が重要な役割を果たすとトインビーは述べているが、極東親子文明の場合の高等宗教である仏教は、「内的プロレタリアートを魅了した浄土宗、浄土真宗、日蓮宗」だけでなく、「支配的少数者（貴族）を魅了したと思われる密教」や「外的プロレタリアートである武士を魅了した禅宗」の三つのグループに分かれ、共存し、それぞれに一定の役割を果たした。

「人類共生の文明社会を求めて」

川口文夫（中部電力株式会社 元会長早稲田大学 名誉評議員）

Higuchi.Takahisa@chuden.co.jp

村上泰亮著の「文明の多系史観」（1998年）の一節から引用する。「現時点の日本社会は、新しい自己認識を強く迫られている」「これまでの日本社会を支配してきた波動が、いずれも、その位相を変えつつあるように思われる。略」

「追いつき型近代」の時代が終わった 21 世紀初頭の四半世紀、村上氏の指摘は、さらに重く受け止めねばならない。

今次、比較文明学会の大会テーマ「長崎で考える共生」に際して、長崎県ゆかりの人物「松永安左エ門」（明治 8 年壱岐に生まれる）に焦点を当てながら、共生社会を目指す系口を考えてみたい。

松永は、壱岐の島の素封家の長男に生まれた。若い時には、海外へ勉学に出たい望みもあったが、家業の都合で果さず、成人して福沢諭吉をたよって慶応の門をたたく。松永の人生は、福沢諭吉、ならびに福沢桃介を抜きには語れないが、ここでは略す。

家業の都合で慶應義塾も中途で去り、その後は、数々の事業に係ることになる。

松永の一生で特筆すべきは、75 歳にして日本の電力体制再編成に担ぎ出され、持ち前の自由主義精神をもって、官あるいは、当時の GHQ と闘った事である。

松永なくして戦後の電力事業が果たした「民営」の成果はないと言える。「電力の鬼」と言われる由縁である。

冒頭の村上泰亮氏に戻るが、氏は、20 世紀中葉のシンクレティズム（折衷主義）に言及しているが、歴史学、経済学など、社会科学におけるシンクレティズムの潮流は、未来社会への真摯な考察を疎外した観がある。

松永は、思想家ではないが、生来の哲学「個の尊重、個の集合体としての社会組織の自由」を熱望し、これを阻害する「専制国家」を嫌悪した。

晩年には、アーノルド・J・トインビー著の「歴史の研究」の日本語版刊行に力を尽くしたが、この著書がヨーロッパ中心史観から離れて、広い文明圏で捷えた点に共感したからであろうと思う。

松永の信念は、「心は物の上に位し、自由な個が、自由な群を構成し、民族国家を超越した文明圏となる」。といった共生社会の核心をついた考え方に基づいていた。

ルネッサンス都市から現代 AI まで：公共性の存在論的探求

犬塚潤一郎（実践女子大学）

j. inutsuka@gmail.com

イタリア・シエナのパラッツォ・パブリコは、13世紀末からシエナ共和国の市庁舎として使われたゴシック様式の建物であり、公共性の象徴としての役割を果たしてきた。特に屋内を飾るアンブロジーヨ・ロレンツェッティによる壁画『善政の寓意』は、理念と政権との間をつなぐ市民たちを描き、西洋の古典的近代の公共性の核心を照らし出している。それは私権と公共性とを、二元論的な対立概念としてではなく、人間性の存在論的な認識において表現するものである。

近代民主主義社会は、その必要条件を個人という主体の自由とするが、それが単なる抽象的なイデオロギーではなく実質をもって実現されるためには、社会そして自然環境・地球がなければならないという認識も、今日の社会と地球環境の複合的な危機の高まりの中で、いっそう鮮明になっている。この問題解決は、基礎は存在論的認識から、実践は地球規模の政治まで、様々な次元において多層・多面的に問われなければならないが、ここでは、「公共性 publicness」の再生の課題において検討したい。

ルネッサンス的な自由都市の精神の起源は古代ギリシア的なものにも求めることができよう。アゴラでの市民に向けたソクラテスの問いかけは、個人の内面性と公共の善を結びつけるものであり、アリストテレスは、個人の善と公共の善、市民としての義務や責任を果たすことと真の幸福を追求することを結び付けた。

一方この西洋の古典的近代の精神は、資本主義経済の発展、グローバリゼーション、情報技術の進化など様々な要因により変更を受け、現代の「公共性」の概念は、私権や市場経済を補完・補助するものとして再解釈されている。むしろ「公共」概念は、いつの時代でも、理解はされても実践への困難を伴う。「利己」は「利他」に対して競争優位をもつためである。しかし人類が存続しえたのは、「公共性」にその存在論的な理由があるのではないだろうか。利己と利他、のような単純な対概念でとらえるのではなく、それらが現れるところの根源的な構造として再解釈する必要があるだろう。

そして今日、人間の行動や文化の深層における「公共性」の役割を再考するうえでは、人間の意味世界の言語的な構造と、その外化（メカニズム化・生活環境化）への一貫した技術・社会傾向の分析が不可欠であると考えられる。生成 AI はその最新の発現であり、科学技術の存在論的批判のもとに人間と社会への意味を問い直す必要がある。

吉田松陰諸国遊歴の第一歩～長崎で見たものは何か～

鎌田出（至誠館大学現代社会学部）

i.kamata@shiseikan.ac.jp

吉田松陰の研究者として知られる海原徹氏の著書に、『江戸の旅人 吉田松陰』という1冊がある。この書名が物語る如く、吉田松陰はその30年の生涯において、北は青森から南は長崎まで、ほぼ日本列島を踏破する。

吉田松陰の旅は、嘉永3年、21歳の九州遊学に始まる。この九州遊学は、松陰が残した「西遊日記」に因んで「西遊」と呼ばれるが、当初の藩への願書では、肥前平戸の葉山佐内の許での「軍学稽古」を目的としていた。しかし、藩より許可が下ると、すぐさま長崎の御鉄砲方久松土岐太郎（高島流洋式砲術）の許に立ち寄りたく願書を追加している。そして、萩を発った吉田松陰は、平戸に直行することなく先ず長崎を訪れる。

「西遊」の様子は、「西遊日記」に詳細に記されている。各地の産業事情、風俗、家学である兵学の視点から見た地勢の観察など、それらは優れて「地理的考察」（大嶽幸彦『旅と地理思想』）であった。また、往来のあった人物に関する記録はもとより、吉田松陰が残した旅行日記中「抄録の多数記載されているものはこの日記だけである」（大和書房版『吉田松陰全』巻7巻「解題」）と言わしめる読書備忘は、読書の人吉田松陰の面目躍如といえる。

それまで郷国（長州）を一步も踏み出たことのなかった若き吉田松陰にとって、この「西遊」がその後の人生の転機となったであろうことは想像に難くない。「西遊」の吉田松陰における意味・意義は、先行諸論考が既に明らかにするところであるが、その多くは「平戸」での経験を中心に置くものである。遊学の目的——平戸遊学——からすれば当然だが、平戸からの帰途、吉田松陰は再び長崎を訪れている。そこから何か読み取れはしないだろうか。

本発表では、「西遊」における吉田松陰の2度の長崎訪問に焦点を当て、優れた観察者であった吉田松陰が長崎で何を見たのかを明らかにしてみたい。それを通して、吉田松陰が「吉田松陰」となる原点、あわせて、「死地」へのカウントダウンの出発点に迫ろうと試みるものである。

250年間の徳川の平和（Pax Tokugawica）を実現させた鎖国政策——共同研究：『歴史の研究』における「日本に関する悉皆調査」の中間報告

三枝守隆（トインビー・歴史の研究会）

myoken-north-gaston@nifty.com

自己が属する同時代の社会を対象化して研究することは、少数の例外はあるが、一般的にいて非常に困難なこととされている。というのは研究者自身がその社会に包み込まれているのであるから、原理的には不可能と思われているからだ。そのことは、自分の視覚という作用それ自体は、自身では見るができないという比喻で言い表すことができる。したがって、自己の属する社会を千数百年の時間が経過してきた社会として把握しようと試みる場合も原理的には不可能になる。ところが、研究対象の文明が、その発生から消滅までの全行程を完了している他の文明の場合には、可能である。言うまでもなく、これが比較文明の認識論的な基礎なのだ。

上述の例外として、よくあげられるのがニーチェである。ニーチェは文献学者として研究を深めているうちに、自身の立ち位置が、現代西欧から古代ギリシアに移ってしまった、といえるのではないだろうか。それと同様に、トインビーもトゥキュディデスの講義をしていた1914年の世界大戦勃発時に、自身の立ち位置が、前431年のペロポネソス戦争勃発時のトゥキュディデスと同じ立ち位置にあることを気がついた、といわれている。そして、本業の国際政治の仕事のかたわら、余暇の時間を使って『歴史の研究』の執筆を続け、1934年から25年間かけて同著を刊行した。

さて、われわれ「トインビー・歴史の研究会」は、この春で発足以来31年目になり、今月までで316回の研究会を重ねてきた。それを記念して『歴史の研究』における日本についての叙述を悉皆調査し、対話（ディアレクティケ）を重ねながら共同研究を進めている途上にある。

その研究の動機は二つある。一つ目は、上述のような背景を前景化して、われわれが生を受けた日本の文明を、『歴史の研究』を媒体として可能な限り対象化し、捉え直すこと。二つ目は日本の学界では、『歴史の研究』において、文明としての日本がいかん語られていたかの全貌が、いまだに把握されていなことについての、問題意識である。

その研究の途中でさまざまな興味深いことがわかってきた。その一つが、首記のテーマである。すなわち、『歴史の研究』では、日本のいわゆる鎖国を「徳川の平和」という観点から論じていたのだ。つまり、決して不合理な外交政策と見ていなかった、ということなる。

そのほかの興味深いトインビーの見解を、時間の許す限り発表したい。

江戸時代の医薬－長崎で学んだ藩医と、売薬商人の活動について－

筒井正二郎（西日本新聞 TNC 文化サークル講師）

tutui1192@yahoo.co.jp

近世・江戸時代の医学における大きな出来事といえば、青木昆陽（1698～1769年）からオランダ語を学び、長崎に遊学した豊前中津藩（大分）の藩医、前野良沢（1723～1803年）、若狭小浜藩（福井）の藩医、杉田玄白（1733～1817年）らが、ドイツ人医師クルムスの『解剖図譜』のオランダ語訳『ターヘル・アナトミア』を翻訳し、1774年『解体新書』（挿絵は秋田藩士、小田野直武が担当）を著したことがよく知られている。また、ドイツ人医師シーボルト（1796～1866年）が長崎に開いた診療所兼私塾「鳴滝塾」で学んだ肥前（佐賀）の蘭方医、伊東玄朴（1800～71年）はイギリスのジェンナーが開発した牛痘種痘法による種痘に1849年に成功し、1858年神田に東京大学医学部の前身となる「お玉が池種痘所」を設けて、天然痘の予防に貢献している。

しかし、これに先立つ二人の藩医が福岡にいたことを今回の発表で紹介したい。一人は筑前（福岡市）の藩医、六代・原三信（元弘）（1655?～1711年）である。元弘は長崎でオランダ商館医から外科術を学んで蘭方外科医の免状を受け、『解体新書』が刊行される87年前の1687年、ドイツ人医師ヨハン＝レメリン（1583～1632年）が1613年に著した解剖書『小宇宙鑑』を筆写して、日本最古とされる翻訳解剖書を著している。もう一人は、長崎に遊学し、その後、筑前秋月藩（朝倉市）の藩医となった緒方春朔（1748～1810年）である。春朔はイギリスのジェンナー（1749～1823年）が、牛痘種痘法を開発する6年前の1790年、中国清の医学書『医宗金鑑』をもとに、牛痘種痘法とは異なる人痘種痘法で種痘に成功し、その後『種痘必順弁』を著して種痘の伝授につとめている。

また、江戸時代は「鎖国」体制下にあり、貿易相手国は中国とオランダに限られ、窓口は長崎のみであったとする見方は現在見直されており、それ以外にも、朝鮮と対馬藩、琉球と薩摩藩、アイヌと松前藩のいわゆる「四つの口」で交易が行われていた。この「四つの口」と薬の流通について、「日本四大売薬」（富山・近江・大和・田代）の中で、富山の売薬商と薩摩・田代（佐賀県鳥栖市）の売薬商と対馬との関係を取り上げる。

以上のことをもとに、17世紀後半～18世紀の時期を中心に、藩医の業績と売薬商の販売ルート的一端を通して、近世の医と薬について報告してみたい。

第 41 回大会実行委員会

委員長	保坂 俊司	中央大学	教授
委員	大森 一三	文教大学	准教授
	小倉 紀蔵	京都大学	教授
	加藤 久典	中央大学	教授
	金子 晋右	佐賀大学	教授
	島田 竜登	東京大学	准教授
	筒井 正二郎	西日本新聞 TNC 文化サークル	講師
	平井 正則	福岡教育大学	名誉教授
	吉田 晃章	東海大学	准教授
	吉野 浩司	鎮西学院大学	教授

共 催 第 30 回中央大学学術シンポジウム「情報文明における共生思想構築に向けての基礎的研究」（研究代表者：保坂俊司）

後 援 長崎市

比較文明学会第 41 回大会プログラム

発行日：2023 年 10 月 10 日

編集・発行： 比較文明学会第 41 回大会実行委員会 事務局

mail: jscsc41st@gmail.com